

三つの願



とよ子

さても昔々、或る年の御正月のこと、天の神様は今日は一つ人間の様子を尋ねて遣らうと思召して、一人の御家來を貧乏らしい旅人の姿として、下界に遣りませした。神様の御使は町から町へとぶらり見物をして歩いてあそこの太郎さんは何をして居るか、此處の次郎は此頃急に伶俐になつた様な、時に向ふの千代子さんは何をむづかつて居るのかしらなどい方々の子供の様子を見てだん／＼と町はづれに出ました。是から次の町迄は却々遠いので急いですた／＼と歩いて行きました。が、其中に日は遠慮なく暮れ掛つて見ればあちこの木の蔭、藪の間から田舎家の燈火がちらつく

様になりました。旅人になつた神様は「扱て、何處か宿屋のある所迄早く行きたいものだが」と足を早めて行くと見ると向ふの曲り角に向ひ合つて二軒の家がありました。近寄つて能く見ると幸ひ何方も宿屋で何れも今夜は別段の御客さまがないと見えて誠に静でありました。神様は

「はてな、何方へ宿つたものかしら」と考へながら見ますと右の方は大層大きな立派な家で御座敷も奇麗そうですが左の方は家も少さし、かまけに草葺のさたない家で宿屋と書いてある入口の障子も煤けて憐れげなものでした。そこで神様は右側の大きな奇麗な宿屋へつか／＼と入つて行つて

「もし、今晚は」と云ひますと奥から立ち出でた亭主らしい男は今入つて来た旅人のきたならしい姿を一目見るや否や

「エー、御客様、今晚は誠に御氣の毒様で御座いますが生憎御座敷が皆ふさがつて居りまして御止め申す所が御座いません。

へい、誠に何うも御氣の毒様で。向ふの宿屋へ御出で下さいませれば多分御宿め申すので御座いませうへい」と一人で喋つて一人で返して居りました。神様は仕方がありませんから向ふの宿屋へ入つて行つて

「今晚は、一の御厄介になります」と申しますと飛び出して来た亭主は小腰を屈めて

「是れは、お客さま能うこそ御出で下さいました。無かし御疲れで御座いませう。唯今御すゝぎを差上ります。何うも御覽の通りのあばら家で御宿め申す御座敷として別に御座いません様なことで誠に御氣の毒様で御座いますすが何うぞ御遠慮なく御休み下さいまし。」とそれは、親切に色々世話をして呉れました。其中にお女房さんは台所で頻りに御馳走の支度をして頓がて御膳を持つて来ましたが見れば麥の御飯に御みをつけの一と椀と外に御香のものが少しばかり外には何の御馳走もありませんでした。神様は是にはちと御困りでしたが、併し御腹は飢いて居るし町へは遠いので仕方がなく不精に箸を採つて食

べて見ると何の結句贅澤な御馳走よりは甘く食べられました。さて御飯も済ましたので神様は宿の亭主や御女房さんと爐にあたりながら色々世間話をして暫く休んだ後おかみさんの布いて呉れた寢床の中へもぐり込んで寝てしまいました。寝ながら聞くとお亭主とお女房さんの話を聞くと亭主の聲で

「今夜は寒いからね、御客様には布団を澤山掛けて上げなよ。私どもはまた例の藁の中へもぐらうぢやないか」

「あ、そうとも、御客様には布団を皆んな掛けて上げてしまつたよ。いゝとも私達は藁の中で澤山だよ」

頻りに内所話しをして居ましたが、此方は神様のことですから幾等小さな聲でもちやんと聞えてしまいました。神様は

「さて、親切な人である」と感心しながら何時の間にか眠つてしまいました。

朝早く起きて見ると、寒いからとお湯が沸かしてあり、爐には盛んに火が燃えて居て朝飯の仕度

もちやんとしてありました。頼がて朝飯も了りましたので神様は出掛け様として

「モシ、御亭主、宿賃はいくらですか？」

「イエ、何う致しまして、お幾らでも宜しう御座います。御覧の通りな、むさい所で嘸御心持悪く居らしたたで御座います。お向ふ様など、比べましたら何も戴かないでも宜しい位で御座います。決してモウ御心配には及びませぬ。御客様が御風も召さず御機嫌よく御宿り下さいました。丈でも澤山で御座いますので、少しも御心配には及びませぬ、一錢でも二錢でも宜しう御座います。御思召で御置き下さいますれば結構で御座います。」

「そうかね、それではほんとのことを話すが、事實は私は、天の神様の御使で人間の様子を見に来たんだからね、今お金は少しもないのさ。其代り茲で宿めて貰つた御禮に何でも三つの御願を叶へさせて上げ様。」

「コレハ、天の神様の御來で入らつしやいましたか一寸とも存じませんで大層失禮致しました。」

た。イエもうそう云ふ御方で御座いますなら何もほしいものは御座いませぬ。一晚でも御世話致すことの出来ましたのが何より仕合で御座います。其他に何も御願ひ申すことは御座いませぬ。貧乏は致して居りますが家も自分の御座いますし、怠けさへしなれば食ふにも困ることは御座いませぬから、別段御願ひ致す様なことが御座いませぬ」と至極さつぱりと欲のない申分です。

「何も願うことがないとはそれは又感心な心掛けた、併し御前さん達は此家をもつと立派なものにしたいい氣はないのか」

「イエナニ、立派な家にしたくないことは御座いませぬが、それは、とても、私の力では出来ないことで御座いますので實はあきらめて居るので御座います。」

「宜しい。それでは私が此家を立派な家にしてあげやう。」

と云ひながら天の使は口の中で何かモゴ／＼と呪文を唱へると是は不思議、見る／＼中に今迄の草

茸の藁家はすつかり消えてしまつて大きな立派な御殿の様な家になりました。

使「さあ家は立派になつたが、次には何が御願ひかね、御前さんは先刻食へるには差支ない」と云つたが幾人で食へるのかね。

亭「へい、私等二人の者がで御座います。」

使「そうか、それならばかりでは仕方がない。それではムグくくく、と是れでお前さん達二人は無論のこと何人でも此處の家に居る丈の人は安樂に暮らせる様になつた。サアもう此外にも一つ御願はないのかね。」

と云ひましたけれど無欲な夫婦は別段の御願も考へ付きませんでした。そこで天の使は

使「何うしてもないかね。それでは斯うしやう。お前さん方の此仕合が何時迄もつゞく様にして上げやう。ムグくくく、と云ふ

かと思ふと「さよなら」もそこへに旅へと出掛け

てしまひました。こんなことをして居る中にそろそろ太陽は裏の山の上に表はれ出て夜は全く明け渡りました。流石

寝坊のお向ふの宿屋もそろそろ起さ出して下女が頼がて表の戸を明けると驚いたの驚かないのつて

お話しにならない程下女は驚いた。

下女「オヤくくく、權さん、八どん、皆

来て御覽よ、向ふの貧乏宿屋は昨夜の中心何處かへ行つてしまつて代りに恐ろしい立派な宿屋

が出来たよ。早く来てお覽よ。」と云ふので大勢

のものが出て見ると成る程下女の云ふ通り立派な御殿の様な家が出来て居ました。大勢の人達がわ

やくく話して居る中に其立派な家の中から出て来た人がある。誰れかと思つて能くく見ると不

議にも例の貧乏宿屋のお女房さんで然も今日は何

となく立派で何う見ても立派な家の奥さんの様に

見えました。けれどもお女房さんは今迄の様子と

少しも變らず、大勢が門口に居るのを見て丁寧に

女房皆さん、おはやう御座います。今日もよいお

天気で結構で御座います」と申しましたので此

方の人達は益仰天して是れはまわ何うしたことだらうと頻りに不思議がつて居りました。併しだん

くと此話を聞いた慾ばり宿屋の主人は

主人「それは惜しいことをした。昨夜自家へ来た時にそうと知つたら宿めて遣るのであつたものを何とも云はないものだから、つい向ふの奴に付合せを取られてしまつた。併しまだ遠くは行くまい、今から追ひかけて、も一度連れて来て自家へ宿めて遣らう、それがいゝゝと一人で承知して大急ぎで馬に乗つて旅人の後を追ひかけました。一時間ばかり追ひ驅けて行つて見ると向ふへ昨夜の旅人がトボ〜と歩いて行くのが見えしました。

亭「オーイお客様ア！、一寸用事が御座いますから少しいまち下さいませい。」と呼び止めて置いて、傍へ行つて馬から降りて

亭「お客様、昨夜は込み合ひまして誠に氣の毒なことを致しました。もう今日はお座敷も明きましたから何卒御出下さいませ。昨夜の代り、色々とお馳走を差上げますから」と申しますと天の使は「ハ、ア、此奴貧乏宿屋が急に仕合せになつたので羨やましくなつて人を迎ひに来たんだな、とちやんと慾張宿屋の心の底迄見抜いてしま

いしましたが、そ知らぬ振して

使「それは〜能々御親切に有り難う。併し私は先を急ぐから今から歸る譯には行かない。けれども折角親切に迎へに来て呉れたのだから、御禮にお前さんの願なら何んでも三つ丈叶へて上げやう。」と云ひますと、慾張り宿屋は大悦びで主人「それは有りがたう御座います。それでは何を御願ひませうか」と考へ出しましたので

天「ナニお前さん、そこで考へないでも宜しい、是から家へ歸りながらゆつくり御考へなさい。私は急ぐから此で失敬」と云ひながら旅人はドシ〜行つしてまいりました。

慾張り宿屋はさて何を願ふかしら何でも三つの願の中に慾しいものを皆入れて願はなければ損だからと道々馬の上で考へ考へ家の方に向いて來ました。

もう半分と云ふ所まで來た時に何に驚いてか馬が急に暴げれ出して何うしても静まりません。餘り云ふことを聞かないので慾張り宿屋は我知らず大きな聲して

「斯う云ふこと、聞かない馬は殺して仕舞ひたいもんだな」と云ふと今迄暴ばれに暴ばれて居た馬が急にたりと倒れて死んでしまいました。是が第一の御願でした。慾張り宿屋は

「ヤレ〜詰らぬことを云つてしまつた」と思ひましたけれども仕方がありません。併し馬は借しくないとした所で此鞍や轡は百圓二百圓では買へない程のものだから昇丈は持つて行かうと馬から脱ぎ出してエツチラオツチラ擔ついで歸つて來ました。幾等冬の寒い時でも重い荷物を擔ついたので二里ばかり來る中に汗はた〜と流れて來る喉は喝いて來て仕方がありません、けれども家を出て來る時に餘り急いで財布を持つて來なかつたので一寸茶店に休む譯にも行かず唯もう我慢に我慢してまた二里ばかり歩きました。併し何うにも斯うにも勘らなくなつて遂には往來へ倒れて仕舞ひそうになりましてので我知らず

「ア、疲れた。たまらなく疲れた。是れがほんとの寶の持腐れと云ふのだな。こんな時にはこんな道具よりは十錢銀貨一個の方がいゝな」と云

ふと今迄いつた馬具はぶいと消えてしまつて足もとに十錢の銀貨が一つ轉り出しました。是が第二の御願でした。慾張宿屋はしまつたと思ひました。がもう探り返しがつきました。仕方がないので悔しまぎれに十錢銀貨を川の中へ抛り込んで驅け足で自分の家へ歸へつて來ました。餘り候が喝くので門口から

「オイ〜水だ〜早く水を一杯呉れ!」とどなり立てました。所が丁度此時に自分の子供が縁側から庭の布石の上に落ちて怪我をしたと云ふ所の家の中は大騒ぎで却々水を持つて來て呉る所の騒ぎではありませんのでしたけれど此方は又生命から〜歸へて來た所ですから子供などの事云つて居られません。大きな聲を出して我知らず「なぜ早く水を持つて來ないのだ、子供など何うでもいゝわい死んだつていゝわい」と云ひましたので大事な子供は死んでしまいました。是れで三つの御願が濟んで慾張り宿屋はあぶばち探らずになりました。